館報 1

山形大学附属郷土博物館　1974・7・1

目次

発刊のことば …… (1)
郷土博物館の将来像と問題点 …… (2)
サンリンガエル（杉林蛙）のふるさと …… (3)
算盤珠石について …… (5)
博物館と私 …… (6)

発刊のことば

館長　工藤定雄

大正期から昭和のはじめにかけて，郷土教育の機運が勃興する中で，師範学校に「郷土室」が設けられた。（昭和４）戦後になって，日本人が，心のよりどころを博物館運動に求めたことがあった。いきおい，郷土博物館が中心になつたが『博物館法』公布の背景に如上の社会教育上の配慮があった。（昭和26）かくして本学教育学部に存続されていた「郷土室」が，文部省告示第13号により，博物館法付則の規程に基ずき，「博物館に相当する施設」として指定された。（昭和27 法29条）「真価が認められた」（本館 栞）ことはたしかであるが，前述の事情の中で承認され，大学機構の中に受入れられるところとなったものと思われる。各地の神社の宝物館，公共の各種陳列館，水族館，歴史館，文化館，史蹟室，郷土資料室，郷土館等々，名称は夫々のニュアンスと由緒を持っているが，多かれ少かれ郷土館的性格をもち，国，公，私立の形で夥しい数のものが創設されている。大学の附属施設として指定されたのは少しくおくれているが，「山形大学附属郷土博物館」と共に認可された国大類似施設はこれまた多きに上る。「岩手大学農学部植物園」「秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館」「東京水産大学附属水産博物館」「岐阜大学学芸学部（現教育学部）附属郷土博物館」「滋賀大学経済学部史料館」等々である。（昭和30.12 文部省告示108号）東京水産大学の「水産博物館」滋賀大学の「史料館」などは，国立学校設置法施行規則の適用に該当するものとして，学部附属の「教育，または研究施設」に認定され，人事と予算措置の恵まれた中で運営されている。本博物館はなお「相当施設」のまゝ今日に至っている。

昨昭和48年度に運営費が文部省から認められた。本館にとっては，懸案のことであり，念願の端緒を漸く手にしたという実感である。大学各部局の周到な対策推進の結果である。大学の教育，研究施設としての認定の段階を印したものといえるが，同時に，「郷土館」時代を脱脚して飛躍すべき姿勢を求められているというべきである。

最近の博物館運営委員会に於て，本館の名称についての意見開陳があった。（昭和49.2）「山形大学附属博物館」で然るべきではないかというのが一致した意向であつた。和名改称の結論づけはなかったが，洋名については従来正式のものはなく次のように意見の一致を見た。

"The Museum of Yamagata University"

その後収蔵品または寄託品等についての学界報告には，本洋名を用いることを併せて申合わせたことは前進であった。従来の「郷土館」的発想には，相応の理由があり，実績を認めながらも，最早や，大学名の「山形」の中に地域性が包括されているので重ねて「郷土」を主張するより，研究と教育の場のひろがり，普遍性に応ずる配慮をふさわしいものとする話題は一つの画期となろう。

研究室との結び付きを深め，学生の単位修得に直結する「資料館」乃至参考館的構想を具体的にすることについては，尚討議さるべき問題が残されている。また，前提として整えらるべきいくつかの業務も明らかである。各部門にわたり，先人の努力による稀に見る豊富な収蔵品については，改めて総点検の上，総目録カードの整備，目録印刷，公表の義務がある。（一部既刊）寄託された貴重資料についての学界報告もまた急務とされる。

名称検討で，一つの手痛い経験をした。同僚を通じてさる一外人に相談した時の話になるが，外人氏が，当の博物館の現状を質し，「建物のない国立大学の博物館が不思議である」と話されたという。本館が中央図書館の一角を借用していることは理解出来なかったのであろう。貴重資料の収蔵，受託，展示に建物のないことは何といっても不思議なことである。公共博物館ブームに応ずる学芸員養成の任も大きく浮び上って来た。

さて，大学の教育と研究施設を目指しての第一歩を確かなものにする為めには，広く学内に知らせ，共通理解の上に，格段の利用を期待し，更に拡充発展の為めの提言を求めるため「館報」を発刊した次第である。

（教育学部　教授）

郷土博物館の将来像と問題点

川副武胤

博物館の将来像を考える前に，その母体である本学が，地方国立大学として，どのように変容して行くかを考えねばならないが，これについて，現段階では，将来の社会の要請から二つの方向が推測される。

一つは，学部・学科・学科目を，それぞれ整備（改編を含む）・増設し，教官と学生の数をふやして，その組織・陣容を拡充し，質的にもその綜合性をつよめる方向である。

もう一つの方向は，戦後，発足以来今日まで，異ったキャンパスをそのまゝに，組織だけを統合一元化してきた方向をかえ，可能なかぎり学部が独立して単科大学となるか，又は，それぞれ異ったキャンパス毎に独立して，それぞれに新しく必要な学部を増設し，別個の綜合大学を目指す方向である。大学運営の面からみれば，異地域のキャンパスをそのまゝにして，組織のみの統・接合をはかったことは，国力が格段に充実し，余裕のできた今となっては，高等教育の理想的な終極の目標であったわけではなく，単に制度上の一つの過渡的な便法であったと考えられるようになって来たからである。

学術研究・高等教育の機関が，一定の人口・広がりという〝後背地〟をもつ地域毎に，平均して普及整備することは，そのまゝ国全体の文化の発達向上につながるから，理想像としては後者の方が前者に勝っている。また，今日，文教当局も国民も，いわゆる大きければよいという綜合大学のマンモス化の弊に，いやという程気づいたばかりのところであるから，過密・過疎問題の処理と相俟って将来はこの方向に進むかと思われる。

さて，大学の将来に対する右の巨視的な展望は，新制山形大学発足以来，徐々に体制を整えて来た本博物館の綜合資料館（ユニヴァーシティ・ミュージァム）への進路に STOP の立札を立てるような印象を与えかねない。しかし，若し将来，異ったキャンパスの独立ということになれば，それは博物館にとってもキャンパス毎の分割・独立が伴う筈で，それは新たな発展を意味しこそすれ，廃止や縮少を意味するものではない。そうだとすると，右の認識に立てば，現在以降その時までは過渡期を意味することになるから，若しそれぞれ実体が伴うならば，丁度図書館がさうであるように，〝分館〟の設立が望ましいかもしれないと思う。これによって各学部負担金の使途と効用，学部への見返りの有無といった問題も解決するであろう。しかしさうなれば，その過渡期にあっては，業務・事務の分散・増加，効率上の不利は避けられないことになる。

次に，右の異なったキャンパスの独立という事態は望ましいとしても，単科大学方式は望ましいとはいえない。今日のように学問が綜合と分極化の二方向に，平行して同時に作用・運動している時代には，現実には綜合大学だけが，いわゆる境界領域―〝学際〟―を含めて，その双方の要求を満すことができるからである。

そうだとすれば，博物館の将来像は，分立の時点を考慮しても，やはり東京大学（必ずしも東大でなくてもよいが）の綜合研究資料館のような性格となろう。ここで便宜上，東大を引合いに出したのは，本学が大学の名に値するかぎり，学術，研究の現在と，その進運に伴って将来も亦，質量とも，その内容に制約が課せられるいわれはなく，その進路の方向と目標は常に無限であるから，さし当っての指標は既存科学の綜合展示場の観ある東大のそれ位が適当だからである。

同館規則には「研究及教育に資するため，学術研究資料を綜合的に収集，整理及び保存し，その有効な利用をはかるとともに，これに必要な施設及設備を維持し，かつ，運営することを任務とする」とあるが，これでは抽象的であるため，同館要覧の冒頭に，これを「人文・社会・自然科学諸分野の研究資料を収集・整理・保管して研究・教育の便宜をはかるとともに，標本・資料を用いて厳密な科学的視点に立つ研究が行なわれる学内共同利用施設である」といいかえている。同館の資料部門は十七に分れているが，なお部門の拡大を計っている模様で，事業としては(1)年一回の展示（期間半年内外），(2)館の公開（秋期）(3)講演会（年二回）のほか，(4)研究報告や業績集の発行を行なっている。

右のうち，(1)(2)に相当する活動は本館も早くから実施している所で，大学のスケールからみれば，むしろ本館の方が相対的に大きいといえよう。本館の現在の乏しい予算から収集・展示（展示は本館所蔵のものだけではない）がすすめられていることは誇るべきであって，これに，(3)(4)のような事業が加われば，事業面において，東大のそれを凌駕するものといってよい。

次に本館の将来の問題点として，なお二三の点をあげたい。

一つは勿論，将来に至って定員・予算の面で苦しむだろうということで，これは改めて取上げるまでもない。これは，これまで一時期，力を入れて来た近世古文書の収集から，広く美術その他の文化財，自然科学部門の資料・標本の収集に進むとき，直ちに直面する障害となろう。

二には，運用面で，これまで行われて来た学生や市民

に公開する教育・サービス部門の強化を目標にしたらよいと思う。この面は本館の伝統であって，本館の「博物館」という名と東大の「研究資料館」という名にも，その姿勢の差があらわれている。そして，借物，展示，公開という博物館活動は，東京とちがう地方と地方大学学生のために，現在なお，必要なサービスであると思う。なお，研究資料としても一部遜色のない収蔵品のあることは周知のところであるが，その研究面でも充実をはかるべきはいうまでもない。ただし，展示のための借用等のことで職員が奔命につかれる等のことは厳に避げねばならない。

なお付言すると，地方の博物館の中には，とくに「博物館でない郷土館を」という方向づけをして運用している館がある。しかし，山形師範学校時代，本館の前身としての「郷土室」が，多分目標としたかと思われる〝郷土性〟は，本館がすでに綜合大学の附属となり，また，他方では昔とちがいすでに県立，市立の博物館が存在する現在では，むしろ郷土性とは反極をなす普遍性・国際性を指向すべきである。現実には郷土性は存続し，また有力な指標の一つであるが，理念としては，普遍的な学問の府としての大学と同方向に進むのは当然の成行きであろうと思う。

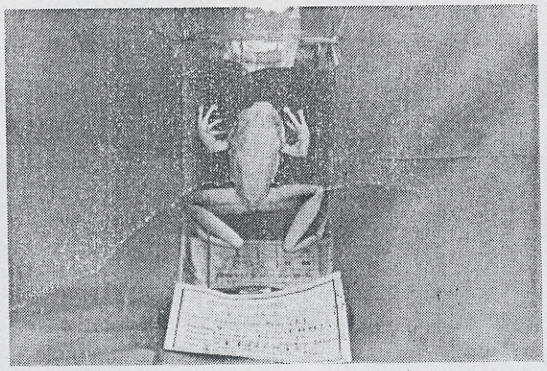
（人文学部　教授）

サンリンガエル（杉林蛙）のふるさと

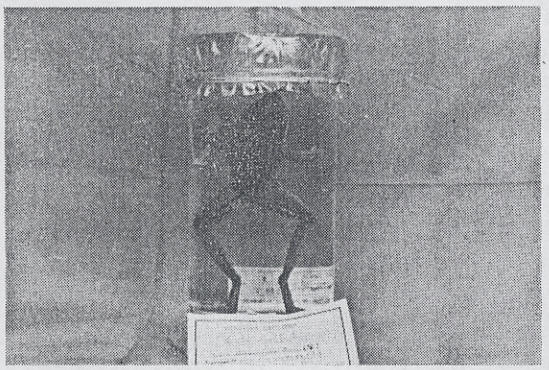
大津　高

現在世界に約2,000種のカエルがいる。即ち動物学上の戸籍に登録された種類が2,000ということで，これからさらに新しい種がふえることだろうし，片方では戸籍簿の誤りから消失するものや，残念ながら公害のために滅亡するものもでてくるであろう。このような状況のなかで今回当博物館に完模式標本および副模式標本の寄託されたサンリンガエルは，昨年（1973）漸く記載即ち戸籍登録されたばかりの，いわば動物学界の新生児である。このサンリンガエルのふるさと台湾に筆者は前後5回訪れた。台湾は太平洋戦争終結まで52年間，我が国の版図に入っていた亜熱帯の島であるが，豊饒な天産物は住民の心を和ませて正しく東洋の楽園の一つであると断言できる。しかし今や台湾は多くの国々から見放され，中共の一部となって微妙な国際情勢の中にうたかたのごとくさまよっている。いまサンリンガエルのためにもう一度彼等の美しいふるさとをふり返ってみよう。

サンリンガエルは学名を Rana Taiwaniana といい，杉林渓底で最初の標本が1970年6月30日に採集された。中国名杉林蛙は，私が渡台する度毎にねじろとして世話になった台北の台湾省立博物館員と相談して名づけたものであり，日本名はそれを日本式に読んだものである。

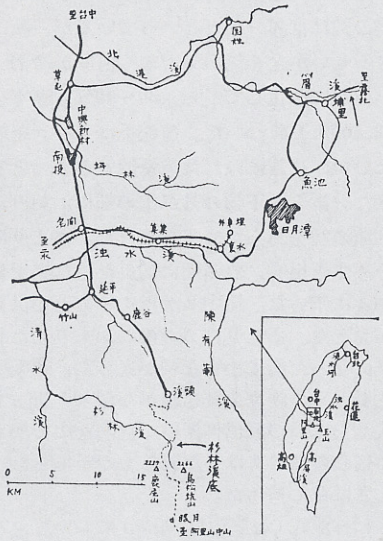


サンリンガエル（雄）



サンリンガエル（雌）

さてその杉林渓底なる土地は中部台湾の荒れ川，浊水渓の一支流，清水渓のそのまた枝川杉林渓の上流で，渇水期には毎秒1ｔたらずの流量であるが6～7月ごろは毎秒3ｔぐらいのすばらしい清流であり水温16°，川幅10～15mである。渓畔の河岸段丘上には日本時代に植えた



杉林渓底

杉林があちこちにあるのでこの名が出たのであろう。

台北から特急列車（といっても日本の急行ぐらい）で2時間半，豊沃な中部台湾農耕地帯の中心地台中につく。私共は6月29日午后おそくここをたって果物の多い南投を通り夕刻，阿里山北側の山ふところにある竹山の町についた。バスターミナル近くの小旅館に入って省立博物館のTさんLさん，それに台湾人たちとざこ寝となった。狭い蚊帳とひどく汗くさいうすいふとんでリュックサックを枕にまどろんだ。しかしこの束の間の夢も物凄いノミの来襲に忽ちかき消され真夜中の午前零時おき上ってそそくさと表に出る。Tさんの手配してくれたトラックの事務所にゆく。奥さんが出て来て今主人（運転手）をおこすから中に入って待っててくれという。寝不足で不気嫌そうにおきてきた主人はすぐ広間の神棚（台湾は儒教で日本の神道の様式に似た行事をする）に燈明をつけ香をたきしばらくの間参拝した。我々と共にジャスミンの入った茶をのんで家の前の7～8t積ぐらいのトラックにのる。

月もなく真暗な郊外をひた走る車のヘッドライトに次々とバナナの巨大な葉が迫っては行きすぎる。時々パッと窓に迫る光る虫は蛾である。やがて道はぐいぐい登りになり杉の林となる。杉林のとぎれた所は太い竹の林がありまたススキその他の丈高い雑草の茂みも見られる。時折り遠く路上にきらっと光るものの眼，車の直前を横切るハクビシンやテンを見ながら道は次第に屈曲が多くまた狭くなり，1方は真に千仞の断崖となる。運転手はずっと吸いつづけて来たタバコも捨てて真剣そのもので，道はいよいよ狭くぬかるみありくずれあり，巨大なごろた石ありでとても普通の車では登れぬしまた常人には危険で運転もできない。傍のTさんは案外平気で台湾の運転手の腕は世界一などといっているが，私はなまじ運転できるせいか全く気が気でなく何度か冷汗をかいた。道が極端に悪化してから，30～40分，漸く小高い峠（海抜約2,100m）についた。運転手はタバコを取出して一服したので，夜露にぬれた窓を開くとさっと寒い風が入って来た。折しも下弦の月が山の端にかかり，私は異郷の一人旅の空をあらためて見上げた。あまりにも寒いのでそそくさと出発，急斜面に切れた道は峯を廻り谷を辿って除々に下った。途中2ケ所に車転落の供養塔の白木の柱が見えた。あたりはカシのこんもりした林で，道がやや平になった所に小さな祠があった。運転手は車を止めて色紙と香の護摩を焚きながな深々と祈っていた。台湾の人たちはいづれ信仰深いが危険な山で働くこれらの人々の信心の深さにはうたれるものがあった。丑三つ時の淋しさは身に迫った。

程なく杉林渓底（海抜約1,800m）について，木こりたちの飯場のひさしの下でぶるぶる震へながら夜明を待った。亜熱帯の夜明けは意外におそく5時ごろになって漸く明けはじめた。忽ち一斉に鳴き出した鳥の声は正に耳を聾するばかりのもので，その主たるものは「チチーヤ」ときこえるチメドリの声である。私はその壮絶さに全く我を忘れてききとれていた。間もなく日は高い山の頂から刻々と谷間を照し出し杉林渓のすばらしい清流とそれにさしかかる緑こい美しいカシ，クスなどの林を見た。私はこれまでこのような美しい熱帯の谷とすばらしい鳥の合唱をきいたことがない。

杉林渓底の朝

夜は霜の下りそうな寒さのこの渓谷も日中はかなり暑い。その日は1日そこで採集したが，とり立てて珍しいものもとれなかつた。しかし夕暮近く川に釣糸をたれて数匹のセイバンゴイを釣った時，ふと川の中の美しい石の上に1匹のカエルを見付けた。流れは急で深く近づけそうにもないので，釣餌を近づけたら忽ちとびついて採集できた。緑の地に紫色の斑点のある台湾で最も美しいサンリンガエルの完模式標本（雄）はこのようにして採集された。副模式標本（雌）は後に竹山に程近い埔里の渓谷で採集され，ここに記載の運びとなったのである。

現在，動物の命名には国際命名規約があって，記載命名に用いた個体標本は模式標本として必ずその所在を明確にしておくことになっている。しかし古い時代にはこのような規約もなかったため，模式標本もないものが多く，特に日本で記載された数種のカエルの模式標本は保管が不完全であったり，太平洋戦争時の空襲の犠牲になったりして殆んど残っていない。これは将来の研究のため大へんなげかわしいことで，私もこの模式標本の行方が不明のため大いに苦労している1人である。サンリンガエル模式標本はこのように学術的に重要なものであるばかりでなく数少ないカエルの模式標本でもある。

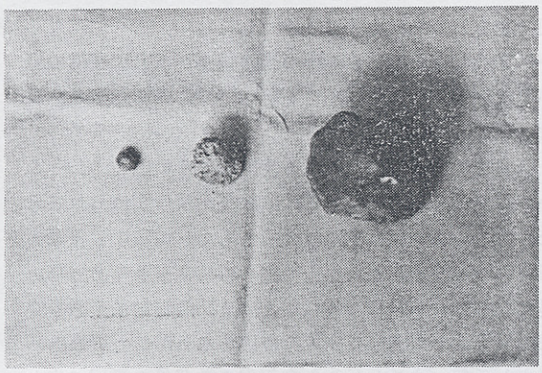
（理学部　教授）

算盤珠石について

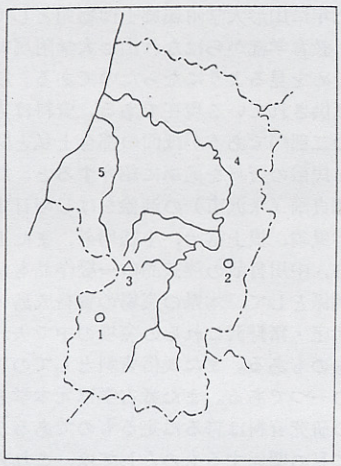
青木和子

郷土博物館所蔵の地学標本には，岩石標本，鉱物標本，鉱石標本，化石標本が含まれている。これらの地学標本類は，他の分野の資料，たとえば，動，植物標本，さらに古文書，民俗資料などにくらべて，人間の匂が感じられない。私達の生活に密接なかかわり合いをもっている鉱石標本でさえも，何故か，人間の匂が稀薄に思われる。これは，無生物の世界を，研究対象としている地学の性格によるものかもしれない。

ところが，地学標本のなかに，〝算盤珠石〟と記入された資料がある（第1図）。産地は小国町である（第2図）。その色は，乳白色～灰白色で，硬く，算盤珠の形をしている。仮りに〝私達の祖先が使用していた算盤が，長期間土の中に埋もれて石化したもの〟と説明したくなる程にみごとな算盤珠様の石である。しかし，この算盤珠は，もとは，岩石（火成岩）のなかにに含まれていたもので，その生成の過程に人の手をわずらわしてはいない。



第1図　ソロバン珠石



第2図　Index map

1：小国町　2：山形市　3：朝日岳
4：最上川　5：赤　川

博物館報に，標本紹介の依頼をうけたが，とかく，なじみが薄くなりがちな地学標本のなかから，私達の生活に関連の深い名前をもった資料をとりあげることにした。算盤珠石は，その名前の示す様に，算盤珠様の形をした石である。自然の妙と言いたいような，その形と，産地が比較的限られていることから，人々に珍しがられ，とくに，愛石家たちに珍重されている。

博物館には，約20個あるが，大型のもの2個をのぞけば，その大きさは，径1.0～2.0cmである。算盤珠は，1個づつ離れているものが多いが，なかには，2個つながっているものも見られる。大型の2個は，その長径，短径がそれぞれ，(10.0×9.0) cm，(5.0×4.0) cm あり，とくに10cmの径を示す標本がみごとである。色は，乳白色～灰白色である。

産地は山形県西置賜郡小国町である。地元では，十四ガ森の算盤珠石として，古くから知られており，昭和37年に天然記念物（山県形文化財）に指定されている。

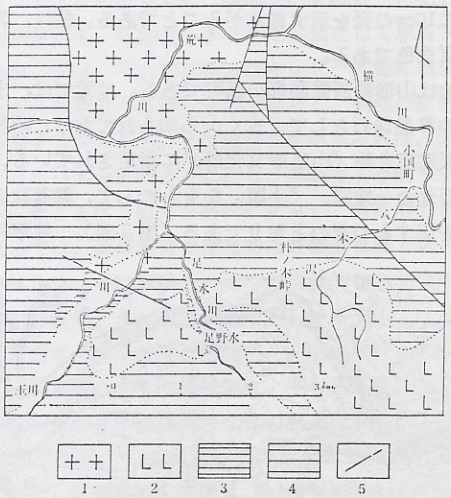
五万分の一地図，〝小国〟をもとにして，算盤珠石の産地を記すとつぎのとおりである（第3図）。地形図の東縁に小国町の中心街がある。この町並より南西にのびて，足野水さらに玉川に至る登山道がある。小国町と足野水との間，小国町から 約2.8kmの地点が朴ノ木峠（標高398m）であり，また，この峠に至る登山道の東南側に発達している沢が八木沢である。八木沢をはさんで，朴ノ木峠と相対する位置に，標高 400mの，なかば弧立した山がある。この山は，八木沢に，急な斜面ときり立

第3図　算盤珠石の産地

った崖とを見せている。この附近を，地元では，十四ガ森と呼んでおり，古くから知られていた算盤珠石の産地はこれである。けれども，〝十四ガ森〟の地名を地図上に求めることはできない。

算盤珠石は，この附近に発達している流紋岩に含まれている。流紋岩が風化して崩壊すると，算盤珠石は流紋岩から遊離する。博物館や愛石家の手にあるコレクションは，こうして母岩から分離した算盤珠石を採集したものであろう。

流紋岩は，酸性の（SiO_2の含有量の多い）火山岩で，球顆や玉髄を含むことがある。球顆は，石英や長石の球状集合体で，偏光顕微鏡で観察すると，針状の石英，斜長石，正長石が放射状に集合していることがわかる。一方，玉髄は，岩石中の割目や孔を充して産するが，算盤珠状の孔を充したものが，算盤珠石と呼ばれて珍重されている。



第４図　朴ノ峠周辺の地質

1：花崗閃緑岩　2：流紋岩　3：古生層
4：新第三紀層　5：断　層

朴ノ木峠地域を含めて，小国周辺には流紋岩が広く発達している（第４図）。この流紋岩は，灰紫色，淡灰色を呈し，新第三紀に活動したものである。また，流理構造が著しく，球顆や斑点状に玉髄も含むのが特徴である。とくに，八木沢附近の流紋岩には長径１～10cmにおよぶ玉髄を多量に含み，算盤珠石の産地となっている。けれども，最近では，手に入れるのが難しい。長年にわたって採集した結果であろう。

〝その名のとおりソロバン玉にそっくり。自然のいたずらにしては，あまりにも凝りすぎており，驚くほかはありません〟と愛石家達は言う。そのために，算盤珠石は，一般の人達にも喜ばれ，珍しがられる。同時に，そのでき方を考えるとき，地学的にも貴重な資料である。十四ガ森の産地は，荒らさぬ様に保存したい。また，博物館や愛石家の手元にある算盤珠石を大切にして欲しい。

（教育学部　助教授）

博物館と私

長野　亘

当博物館は旧師範学校時代から自然発生的に育って，今日のような一応の姿になったのである。しかし大学の附属博物館としての理想的な構想にはまだまだほど遠いのである。

私がこの博物館とのかゝわりあいをもったのは，山形に着任して早々今から三十年前の昭和十八年，戦争たけなわな頃であった。山形市に突然海軍の人事課が疎開するので，山形県教育会館（木の実町）を明けわたさねばならなくなった。当時この会館内にあった郷土室の収蔵品の一部が師範学校の郷土室に運びこまれ，前館長の長井政太郎さんの指示で整理した。しかし遠い昔のことで何々をもちこまれたかはっきりしてない。各部門はたしかに充実したのである。その当時郷土がん具は美術の資料室に保管したので現在でも珍品が博物館に収蔵され昔懐しく思っている。

長井さんの博物館に対する情熱というか執念というか，古文書を中心として各門に収集が積み重ねられてきた。然し予算の裏付けは貧弱であった。従って貴重な資料もみすみす断念しなくてはならぬ場合も多々あった。是非記しておかねばならぬことは，旧師範学校や教育学部の父兄会や同窓会の多大の援助があったことである。私もお手伝いするかたわら文部省の学芸員の講習に出かけていったこともあった。

昭和二十七年に山形大学附属郷土博物館として文部省に認められ，教育学部からはなれ山形大学附属郷土博物館として日のめを見るようになったのである。収蔵品は研究の資料に供されている現在である。資料は人文科学と自然科学の二部門であるが紙面の都合上私と関係深い美術・民芸・民俗の資料を簡単に紹介すると，郷土関係の美術作家椿貞雄（米沢市）の油絵をはじめ日本画の菅原白竜，細谷風翁，根上富治，小松均外，また工芸品として結城哲雄，中川哲哉の漆芸品の一級作品も蔵されている。民芸関係として，本県の窯場の資料成島・平清水・上ノ畑・新庄・猪野沢これらの窯場の中で失われた窯場の貴重なものもある。また民俗資料としての履物類の数々も珍品の一つである。また考古学は元本学教授の柏倉亮吉さんの研究資料は誇るに足るものであろう。今後の方向として私の関係するものとしては，これらの収蔵品（美術・民芸・民俗）を系統的に整理し足るざるものはおぎなって充実を図らねばならぬと思っている。

（教育学部　教授）

山形大学附属郷土博物館報　No. 1
1974・7・1 発行
編集兼発行人　山形大学附属郷土博物館
（〒990）　山形市小白川町一丁目4－12